

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：27104

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26780316

研究課題名(和文) 多分野で展開可能なケアマネジメント方法に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Study of Care Management Practice in Multi-field Social Work

## 研究代表者

河野 高志 (KOHNO, Takashi)

福岡県立大学・人間社会学部・講師

研究者番号：50647237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多分野で展開可能なケアマネジメントの枠組みの構成要素を明らかにした。具体的には、直接的支援と間接的支援の視点に加え、利用者志向とシステム志向の視点を用いてケアマネジメントの展開枠組みを考察した。多分野で展開されるケアマネジメントの実施状況を、これらの視点から捉えることができたことから、この4つの要素から展開枠組みを構成できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, components for the framework of care management practice in multi-field social work are identified. These components consist of following perspectives; "Direct-practice", "Indirect-practice", "Client-oriented" and "System-oriented". Care management practice in multi-field social work can be carried out from the four perspectives.

研究分野：ソーシャルワーク方法論

キーワード：ケアマネジメント ソーシャルワーク 多分野での実践

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、申請者がこれまで実施してきたケアマネジメント研究の継続研究である。具体的には、従来、政策的手法やソーシャルワークの一方法などと多様に理解されてきたケアマネジメントの概念を再考し、日本の状況に適したケアマネジメントの方法をソーシャルワークの視点から構築していこうとする研究である。この研究の基礎となっているのは、申請者の博士学位論文『ソーシャルワークにおけるケアマネジメント方法の構築 実践研究による方法の理論的検証』（京都府立大学、2012年3月）である。この博士学位論文では、まず日英米のケアマネジメントを中心に、その展開枠組みを先行研究から整理し、ソーシャルワークとして実践する方法を検討した。そこでは、ケアマネジメントがマイクロ・レベルのサービス調整からマクロ・レベルの効率的なサービス活用までの幅広い特徴をもつことを整理し、それらの特徴を発揮するための実践活動を先行研究から抽出していった。そして、それらを含めたケアマネジメント方法をソーシャルワークの展開過程と関連づけながら検討していった。次に、知的障害のある人たちへの支援においてこれまで検討してきたケアマネジメント方法を試行して事例研究を行い、ソーシャルワーク実践としてのケアマネジメントの展開方法を考察していった。その結果、マイクロ・レベルからマクロ・レベルの特徴をもったケアマネジメント方法の枠組みを提案することができた。

そこで次に、マイクロ・レベルからマクロ・レベルのケアマネジメントが実際の現場でどの程度実践されているのかを明らかにするため、福岡県立大学 平成25年度研究奨励交付金（個別研究）「ソーシャルワーク実践としてのケアマネジメントの展開に関する基礎的研究 福岡県内の相談支援機関へのアンケート調査から」（70千円）において、福岡県内の相談支援機関500か所（高齢、障害、児童・家庭、医療、地域を含む）を対象にアンケート調査を実施した（272/500件、回収率54.4%）。この研究の結果、ケアマネジメントの実施状況には（1）直接的支援と（2）間接的支援の2因子が影響していることがわかってきた。研究開始当初は、実施状況に関わる質問項目をマイクロ・レベルからマクロ・レベルのケアマネジメントの実践活動から構成していたため、マイクロ・メゾ・マクロの3因子あるいはマイクロ・メゾ・エクソ・マクロの4因子の影響を想定していた。しかし、直接的支援と間接的支援の2因子が現場では重要なキーワードであることがわかり、日本のケアマネジメント状況に関する認識を若干修正する必要性がでてきたと考えた。

そのため、ここまでの研究をふまえて（1）直接的支援と（2）間接的支援の2因子を1つの軸としながら、先行研究で重要視されて

きた利用者志向とシステム志向という2要因からなる概念を加えて、日本の状況に適したケアマネジメント方法を検討してみる必要性を感じた。なぜなら、これまで想定してきたマイクロ・レベルからマクロ・レベルのケアマネジメントには、直接的支援と間接的支援の要素が含まれているが、それだけでケアマネジメントの展開枠組みを構成するには不十分だからである。そこには、直接的支援-間接的支援という要素だけでなく、利用者や関係者のネットワーク、さらにはケアマネジメントを支える体制という要素が含まれているため、これらの要素を検討することができる概念が今後の研究を進めていくうえで必要になるのである。こうした理由から、利用者志向とシステム志向という視点の導入を考えた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、マイクロ・レベルからマクロ・レベルの特徴を包括したケアマネジメント方法の構築を目指すことにある。特に、ケアマネジメントを先駆的に導入してきた高齢者分野のみならず、あらゆる社会福祉の実践分野で展開可能な方法の検討に焦点を当てている。そのために、これまでの自身の研究で明らかにしてきた直接的支援と間接的支援という2つの要素に加え、新たに利用者志向とシステム志向という視点の要素を検討しながら、ケアマネジメントの展開枠組みを作成していく。具体的には、以下の課題に取り組んだ。

ケアマネジメントにおける利用者志向とシステム志向の特徴の整理  
新たな視点を取り入れたケアマネジメント方法の検討  
日本のケアマネジメント実施状況の把握  
アンケート結果の分析・考察をとおしたケアマネジメント方法の検証

### 3. 研究の方法

本研究では、まず研究の基礎部分として、諸外国の先行研究を含めてケアマネジメントの利用者志向とシステム志向の実践上の特徴を整理した。ケアマネジメントの利用者志向モデルとシステム志向モデルは、Austin, C.D. (1990)によるケアマネジメント・プログラムの方向性の分類である（副田あけみ1995）。そのため、ケアマネジメントを実践する際に利用者ニーズの充足に主眼を置くか、あるいはサービスの効率的な配分に主眼を置くか、という方針を検討するうえで有用な概念である。そしてこれは、マイクロ・レベルからマクロ・レベルにおける利用者や支援ネットワーク、さらにケアマネジメント体制との関わりを分析する視点になると考えられるため、ケアマネジメントの展開枠組みの要素になり得る。このことからまずは、先行研究を渉猟し、ケアマネジメントの利用者志向モデルとシステム志向モデルの特徴を抽

出・整理した。

次に、これまでの研究成果からまとめたケアマネジメント方法の展開枠組みに、利用者志向とシステム志向の視点を加え、新たなケアマネジメント方法の展開枠組みを検討した。ここでは、直接的支援・間接的支援と利用者志向・システム志向を軸として、具体的な実践内容の検討を行った。その際、現場のソーシャルワーカーの意見や考えを聞くことで、より実態にそくした内容を整理していった。

そして、このように整理したケアマネジメント方法について、その展開枠組みの妥当性や実際の実践状況を把握するためにアンケート調査を行った。全国の相談支援機関（地域包括支援センター、障害福祉サービス事業所、社会福祉協議会、一般病院、精神科病院、福祉事務所、児童相談所）1000ヶ所を無作為で抽出し（回収 498 件/1000 件）、ケアマネジメントの実施状況や実施方針について把握したうえで SPSS23 を用いて分析・考察していった。

#### 4. 研究成果

まず、本研究で実施したアンケート調査の回答者について表 1 に示した。性別は男女が同じ割合となり、年齢層では 30 代から 50 代が大半を占めている。経験年数は 10 年未満が 65.4%、15 年未満だと 83.5%となり、主に 2000 年代のソーシャルワークの実態を反映する回答者の構成といえる。分野は、各分野の割合が約 10~20%で構成されており、大きな偏りがないものと考えられる。資格についてのみ複数回答である。

次に、河野（2015）をもとにケアマネジメントの内容を 20 項目に整理し、それぞれの実施状況から因子分析を行うと、ケアマネジメント展開の枠組みとして第 1 因子「サービス提供システムの改善・向上・開発」（ $\lambda = .903$ ）と第 2 因子「利用者へのサービスの調整・活用・提供」（ $\lambda = .878$ ）が明らかになった。先行研究から整理していたケアマネジメント方法でいうと、第 1 因子が間接的支援の要素で、第 2 因子が直接的支援の要素である。すなわち、これまでの研究から得たケアマネジメントの展開枠組みの要素の妥当性を検証できたといえる。また、これらの因子については、ソーシャルワークの各分野において実施状況に違いがみられた。具体的には、地域包括支援センターと障害福祉サービス事業所で第 1 因子、第 2 因子ともに高い実施状況がみられたのに対して、児童相談所や福祉事務所、一般病院、精神科病院では第 2 因子の実施状況が他の分野に比べて有意に低いことがわかった。さらに一般病院と精神科病院では、第 1 因子の実施状況も多分野に比べて低く、ケアマネジメントの実施状況が全体的に低い傾向にあることがわかった。一方、障害福祉サービス事業所、社会福祉協議会、地域包括支援センターでは、第 1 因子の

表 1 回答者の基本属性

属性	区分	n	割合
性別	男性	249	50.0%
	女性	249	50.0%
年齢	20~29 歳	58	11.7%
	30~39 歳	178	35.7%
	40~49 歳	138	27.7%
	50~59 歳	116	23.3%
	60 歳~	6	1.2%
	未回答（欠損値）	2	0.4%
	平均年齢 41.1 歳 標準偏差 9.5		
経験年数	5 年未満	177	35.5%
	5~9 年	149	29.9%
	10~14 年	90	18.1%
	15~19 年	45	9.0%
	20 年以上	35	7.0%
	未回答（欠損値）	2	0.4%
	平均経験年数 9.3 年 標準偏差 6.9		
分野	児童相談所	98	19.7%
	福祉事務所	53	10.6%
	障害福祉サービス事業所	47	9.4%
	医療機関（精神科以外）	71	14.3%
	医療機関（精神科中心）	66	13.3%
	社会福祉協議会	58	11.6%
	地域包括支援センター	84	16.9%
	その他	19	3.8%
	未回答	2	0.4%
資格	社会福祉士	267	53.6%
	精神保健福祉士	137	27.5%
	介護福祉士	76	15.3%
	社会福祉主事	402	80.7%
	介護支援専門員	162	32.5%
	保健師	24	4.8%
	教員免許	51	10.2%
	その他	83	16.7%

実施状況も多分野に比べて高い項目が多く、ミクロからマクロのケアマネジメントを実施しやすい傾向にあることが理解できた。

また、ケアマネジメントの利用者志向とシステム志向については、児童相談所と福祉事務所がシステム志向のケアマネジメントを展開する傾向にあり、それ以外の機関で利用者志向のケアマネジメントを展開していることがわかった。これは、基本的に制度上のサービス提供を業務範囲とする行政機関としてのシステム志向の傾向が強くみられており、民間の機関は相対的に利用者志向の傾向を示したと考察できる。

さらに、ケアマネジメントを実施するうえでの問題としては、利用者や家族との関わりについての問題、社会資源や制度・政策の不十分さに関する問題、社会資源の開発に関するソーシャルワーカーの苦手意識の問題、が特徴的にみられた。このことから、それぞれの分野での利用者との関わり方というミクロ・レベルから、社会資源の整備や

開発の方法といったマクロ・レベルの問題がケアマネジメントの障壁となっており、多分野で展開可能なケアマネジメント枠組みを構築するためには、それぞれの分野における具体的な対応方法の検討なども必要と考えられる。

こうした研究結果から、多分野で展開可能なケアマネジメント枠組みの構成要素として、直接的支援・間接的支援・利用者志向・システム志向という視点が明らかになった一方で、具体的な枠組みの構築のためには各分野の具体的な実践における共通点と相違点を分析していく必要があるといえる。

## 5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

河野高志「日本のソーシャルワークにおけるケアマネジメント展開の状況(1) ケアマネジメントに関わる問題と実施方針」『福岡県立大学人間社会学部紀要』第24巻 第2号、福岡県立大学人間社会学部、2016年2月、pp.91-103、査読無

〔学会発表〕(計1件)

河野高志「多分野のソーシャルワーク実践にみるケアマネジメント展開の特徴 相談支援機関へのアンケート調査から」日本ソーシャルワーク学会 第32回大会、日本社会事業大学(東京都清瀬市)、2015年7月19日

## 6．研究組織

(1)研究代表者

河野 高志 (KOHNO, Takashi)  
福岡県立大学・人間社会学部・講師  
研究者番号：50647237